# 日本スポーツ社会学会会報

Vol.46

# Sport Sociology


１．第 16 回大会特集
・実行委員会委員長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・１
・実行委員会企画シンポジウム・・・・・・・・・・・・・２
・研究委員会企画シンポジウム・・・・・・・・・・・・・３
・国際シンポジウム・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
・一般発表Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
Ⅲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９
２．2006 年度総会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
３．理事会報告
・新理事長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
・２００６年度後期理事会議事録要旨・・・・・・・・・３１
４．事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
編集後記



日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

2007 年 8 月

## １．第１６回大会特集

### 実行委員会委員長挨拶

# 日本スポーツ社会学会第16回大会を終えて

実行委員会代表 佐川哲也（金沢大学）

第 16 回日本スポーツ社会学会金沢大会は，３月 25 日（日）朝の大きな揺れとともに始まった。能登に甚大な被害をもたらした能登半島地震である。コンクリートで固められた建物の３階にある金沢大学のオフィスでも，経験したことないほどの揺れが１分近く続いた。「学会開催は大丈夫」と自分に言い聞かせたが，「理事会はダメかもしれない」と頭の中をよぎった。とにかくテレビをつけたが，生活圏の直ぐ近くで起きた地震の前で，テレビはほとんど機能していなかった。私が知りたかった列車の運行状況を把握することはできなかった。電話回線は直ぐに瀕死状態に陥ったが，インターネット回線は生きていた。電車で午前中の移動を予定していた理事たちは，列車の運行見合わせに足止めをくったようだ。インターネット経由で足止めの連絡が届いた。伊藤会長からはメールで「理事会には間に合いそうにない。学会が予定通り実施できるかをホームページで公開できないか」と指示がきた。理事会の開催について心配したが，とにかくに時間がたつのを待つしかなかった。結局，前日に金沢入りしたメンバーと当日飛行機で小松に到着したメンバーの佐伯理事長，萩原事務局長ら５人ほどで出来る範囲の議題だけでもと理事会が始まった。この頃から，携帯電話での連絡が入るようになり，「湯沢から東京に引き返した。明日の朝飛行機が取れれば向かう」などの連絡が入るようになった。

地震の影響で一体何人の会員が参加してくれるのだろうか，演題のキャンセルはどのくらいになるのだろうかと心配をしていたが，当日参加者を含めて 150 人もの方々が金沢大会に参加くださった。地震の不安を感じさせない，いやむしろ地方大会としては大規模な大会となった。とりわけ台湾師範大学からは，院生を含めて 22 演題 25 人が参加してくださり，「ありがたい，ありがとう」を何度も口にする２日間であった。一般発表演題数が 54 題に及んだことで，発表会場を６会場にするという異例の大会となり，フロアーがやや寂しい会場もあったが，総じて満足のいく学会大会にすることが出来た。大会前は心配ばかりであったが，「よい大会であった」と声を掛けていただき，また，地震の義援金にもご協力いただいた。事務局としては，慌ただしい３日間であったが，おおむね満足のいくものであった。ご参加いただいた会員の皆様と，不満を言わずに手伝ってくれた学生の皆さんに本当に感謝している。

能登半島地震は３ヶ月が過ぎ，「がんばろう，能登」を合い言葉に徐々に復興に向かおうとしている。この機会に能登半島訪問を楽しみにされていた方のほとんどはキャンセルを余儀なくされたことだろう。能登復興のためにも，是非この夏休みに能登半島を訪問していただき，能登の良さを味わっていただきたいものである。以後の大会で大きな地震に遭遇しないことも併せて祈りたい。

## 実行委員会企画特別講演

### 大久保英哲先生「旧制高等学校のスポーツ活動研究」

佐川哲也(金沢大学)

平成 18 年は，四高開学 120 年に当たる記念の年であった。四校とは旧制第四高等学校であり，一高（東京），二高（仙台），三高（京都）と並ぶ第４学区の旧制高校である。四高記念年に開催される金沢大会には，四高生たちのスポーツ生活を演題にしたいと考えていた。なぜなら，旧制高等学校における運動部活動が，我が国の学校運動部の伝統形成に大きな影響を及ぼしたと考えられるからである。

特別講演をお引き受けいただいた金沢大学教育学部の大久保英哲教授（体育史）は，日本体育史を地方から再検討することに意欲的に取り組まれており，旧制第四高等学校におけるスポーツ活動研究の第一人者である。大会二日目の午後に開催された特別講演にもかかわらず，大勢の会員が大久保教授の講演に耳を傾けた。

大久保教授は，金沢の四高が京都の三高に対校試合を始めたことが我が国の大学対抗戦インターハイの先駆けであるという。四高ではこの京都遠征団を「南下軍」とよび，京都へ向かう仲間のために「南下軍の歌」を歌った。この伝統は現在でも金沢大学剣道部に引き継がれており，県外遠征する選手たちの壮行に際して，駅のホームで声高らかに歌って送り出している。

大久保教授は四高柔道部主将として学生生活を送った作家井上靖を事例としてとりあげ，氏の小説『北の海』の記述と史料に基づいた当時の柔道部のスポーツ生活とを交えながら分かりやすくお話しいただいた。四校柔道部の対外試合記録『南下戦記』および練習日誌『南下軍』から，大正３年頃，大正 10〜11 年頃，昭和２〜３年頃に焦点を絞り練習内容や戦績，練習への出席状況などから時代的変化に沿って報告された。大正３年頃のスポーツ活動では，対外試合が開催される３か月前から練習に熱が入るものの，それ以外の時期は欠席者が多かったり，練習が短かったりと「牧歌的」「合理的」「常識的」雰囲気を持った活動であったとしている。大正 10 年頃は四校柔道部が高専大会での７連覇が途切れた翌年ではあるが，本格的な練習の開始時期がやや早まったものの大きな変化はないとしている。

ところが，井上氏が在籍していた昭和３年当時の活動では大きな変化がみられる。練習は通年化され，高専大会での優勝を目標として，日々練習に明け暮れる生活が史料から読み取れる。とりわけ夏・冬・春の休暇時に行われた合宿では，長時間にわたって過酷な練習が行われていたという。小説『北の海』に描かれた「修道院」的運動部活動は，この時期の体験が基になったものであろうと大久保教授は分析している。四高柔道部の練習内容の変化は，７連覇の偉業を成し遂げた時代の再現を夢見る学生たちの目標が徐々に非合理で悲壮感を漂わせる「修道院」的運動部生活へと傾斜していったのではないかと仮説的にまとめられた。

参加者した会員の多くが大久保教授の語る 80 年ほど前の旧制高等学校の運動部生活を頭に描きながら，現在の大学運動部，あるいは日本のスポーツ活動との比較論を展開していたことだろう。

## 研究委員会企画シンポジウム

**「スポーツの空間／空間のスポーツ　戦前期の都市と国家」**

●石坂友司（筑波大学）
「スポーツがつくり出す都市空間 －プロジェクトとしての東京オリンピック－」

●関直規（弘前学院大学）
「戦間期の社会体育行政と都市空間」

●吉原直樹（東北大学）
「戦間期仙台の余暇空間」

中島信博（東北大学）

研究委員会では、昨年度から「スポーツの空間／空間のスポーツ」というテーマを掲げてきたが、２年目は「戦前期の都市と国家」と題して、３人の報告者と３人のコメンテーターに登壇していただいた。

報告１は、石坂友司会員（筑波大学）が「スポーツがつくり出す都市空間：プロジェクトとしての東京オリンピック（1940 年）を事例として」と題し、戦時下のスポーツ空間を都市空間との関連から論じようと試みたものであった。なかでも、都市の美観形成や運動競技場の建設を具体的に取り上げ、そこでの国家と都市の関係に焦点を当てようとした研究であった。

報告２は、会員外から関直規氏（弘前学院大学）に依頼し、「戦間期の社会体育行政と都市空間」と題して論じていただいたものであり、東京市を事例とし、さらには三橋義雄を追跡することにより、市民体育の成立と展開の具体像が示された。

報告３も非会員に登壇を願い、吉原直樹氏（東北大学）が「戦間期仙台の余暇空間」について、グライヒシャルトゥンクを鍵概念として論じていただいた。仙台を事例として、都市化と地域社会の変容という関心をベースに、娯楽空間の拡大と変容／再組成を、多様な切り口から取り上げた報告であった。

第一コメンテーターの坂上康博会員（福島大学）は、これまでの歴史研究を専攻してきた視点から石坂報告について、戦時中のイメージがかなり違ってきたという驚きを表明した。そして、都市が国家を追い抜いていた側面に注意を喚起されるとともに、国家政策と自治体との関係をより柔軟にとらえる必要性が明らかとなったと述べる。

第二コメンテーターの小澤考人氏（東京大学）は関報告について、主要には市民体育出現の背景に関心のあるところから、健康、レクリエーション、労働などとの関係についてより詳しい説明を求めた。

第三コメンテーターの坂なつこ（一橋大学）会員は、吉原報告に関連して、仙台の特殊性に言及し、余暇空間の少なさという通俗的イメージに対し、戦前期すでに多様な娯楽が存在し、均質化の中にもかかわらず新たな主体が登場していた可能性という問題を指摘する。

フロアからも多彩な質問などが出され、時間が不足ではあったものの、戦前期の研究がもつ潜在的可能性が浮かび上がってきた討論であったと思われる。

## 国際シンポジウム

**「アジアにおけるグローバリゼーションとスポーツ －Globalization and Sports in Asia－」**

●スティーブ　ジャクソン（オタゴ大学　ニュージーランド）
「グローバリゼーションとスポーツ：アジアの境界内、
そしてアジアを越えての現在と未来の研究領域」

●シン　イハン（サウスカロライナ大学　アメリカ）
「プロスポーツ競技および競技者の興隆と没落：日本における大相撲の事例を通して」

●黄　順姫（筑波大学　日本）
「2006 年のワールドカップサッカー、多文化的サポーターの空間、デイアスポラ」

杉本厚夫（京都教育大学）

スポーツのグローバリゼーションは、経済ボーダレス、文化帝国主義、民族主義、ナショナリズム等、さまざまな側面から語られる中で、アメリカナイゼーション、コマーシャリゼーション、ローカリゼーションという用語が錯綜し、ますます混沌としてきている。そこで、アジアにおけるスポーツのグローバリゼーション研究の方向性を模索するために、今回のシンポジウムを企画した。スティーブ・ジャクソン（オタゴ大学・ニュージーランド）教授は「アジアの内外における現在とこれからの研究領域について」を発表し、これからのアジア研究では、強大な人口を抱える中国で開催されるオリンピックにおいて、スポーツと協賛企業が地域の文化と政治にどれほどの影響を与えるのか、また、アジアの大会において、さまざまな文化や宗教的な違いを開催国はどのようにマネージメントするのか、とりわけイスラム教徒の競技者がグローバル化するスポーツをどのように受け入れるのかが興味深い研究となろうと指摘した。

シン・ウハン（サウスキャロライナ大学・アメリカ）教授は「日本の相撲力士の栄枯盛衰：勝敗と怪我の重回帰分析を通して」を発表し、多くの「外人力士」を抱える日本の相撲は、多様な体格の力士を有するが、この身体的な違いが昇進と降格をどのように規定しているのか、あるいは怪我とどのような関連があるのかについて重回帰分析を行い、これからの研究の方向性を提示した。

黄　順姫（筑波大学・日本）教授は、「2006 年ワールドカップサッカー・多文化･ディアスポラ」を発表し、日本と韓国の両方を応援する在日韓国人サポーターが集まる「新宿大久保」のフィールドワークを通して、グローバルエスニシティを共有するディアスポラの特性について分析し、メガスポーツイベントと多文化共生の可能性について論じた。

以上の発表に対して、コメンテーターのカン・ヒョミン（カンウォン大学・韓国）教授は、韓国のグローバリゼーションの現状を紹介して、アジアのスポーツとグローバリゼーションの研究の必要性についてコメントした。

このようにアジアにおけるスポーツのグローバリゼーション研究の方向性について、重要な示唆を得ることができたシンポジウムであった。

## 一般発表Ⅰ

**〈会場A〉座長：水上博司（日本大学）**

**戦前日本における社会的熱狂の対象としての「オリンピック」の形成過程**

浜田　幸絵　（東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科）

**北京オリンピックにおける「市民参加」政策に関する一考察**

**－「ボート競技・コックス選抜」イベントを中心に－**

王　篠卉　（関西大学）

**オリンピック招致運動の都市効果－福岡市長の戦略－**

白石　義郎　（久留米大学）

**スポーツイベント招致と都市　－UKの事例研究－**

金子　史弥　（一橋大学大学院社会学研究科）

本セッションの４報告は、オリンピックスタディーズである。４報告に共通しているものは、近代主義の社会学に特徴的であった機能・構造分析をこえて、オリンピックの周縁にある客観的現実を丹念にリサーチして、その現実から社会へのまなざしを持とうとする姿勢である。そして、４報告の各々が取り上げた事例の周縁には、マス・メディアがつくりだす物語や記号から客観的現実を検証しようとする点が共通している。この共通点はけっして偶然ではなかろう。

オリンピックをめぐるマス・メディアは、個や社会とどのように溶解作用をおこし、客観的現実としてのオリンピック社会を具現化しているのか。４報告を聞いて筆者が感じたことである。換言すれば、オリンピックスタディーズが方法論の基礎構造としてマス・メディアとの溶解作用からスタディーズの存在そのものを位置づけようとしているのではないかということである。具体的には４報告者から学会発表以外の場で報告されると思うので、先述した点に関しての筆者の詳述はしないが、４報告について、オリンピックとマス・メディアとの溶解作用を簡単に述べると次のとおりである。浜田氏の1908年から1928年の新聞メディアをめぐる五輪報道の物語作用の形式知化、王氏の北京五輪のボランティア（コックス選抜）たちの存在を意味づけているマス・メディア。白石氏の五輪招致活動をめぐる福岡圏マス・メディアの中央圏権力へのゆさぶりとそれによる都市効果。金子氏のブリティッシュ・スポーツ界にみる五輪招致と都市開発をめぐるマス・メディアの伝統性、という具合である。いずれもマス・メディアが、４報告の客観的現実としてのオリンピック社会を詳述するための「方法」としての基礎構造の中核に位置していたのではなかろうかと思う。

**〈会場B〉座長：菊幸一（筑波大学）**

**潜在的機能と潜在的カリキュラム　スポーツと教育における「かくれた作用」の言説空間**

原　祐一　（東京学芸大学）

**小学校教師の職業的社会化における体育科授業研究が及ぼす影響に関する研究**

**－ライフヒストリー研究を視点として－**

鈴木　聡　（東京学芸大学附属世田谷小学校）

**体育教師の「脳みそ」は本当に「筋肉」なのか？～ラベリングと学校文化の近代性～**

野村　圭　（東京学芸大学）

**運動部活動における教師－生徒関係の記述的研究**

**―都内公立中学校ラグビー部のフィールドワーク―**

中澤　篤史　（東京大学大学院）

本セッションのテーマは、上記のようにいずれも「体育」を対象とした体育社会学的分野の研究であり、スポーツ社会学会では近年、あまり関心が向けられなかったテーマといってもよかろう。しかし、日本のスポーツが今なお圧倒的に体育「界」の影響を免れ得ない歴史社会的状況にある以上、目先の、華やかなスポーツ現象にとらわれることなく、その背景にある体育的なハビトゥスや特徴を的確にとらえ、社会学的に説明することは未だに看過することができない課題であり、スポーツ社会学にとっても重要なテーマにつながるはずである。その意味で上記のテーマは、いずれも＜教育―学校―体育―教師―生徒＞といったカテゴリーを、マートンの潜在的機能（Latent function)、ライフヒストリー研究、ラベリング論、記述的フィールドワーク等々の概念や手法を用いながら分析し、新たな知見を得ようとする若手あるいは教育実践者の営みであるという点に大きな意義があるように思われる。

しかしながら、（だからこそ、と言ってよいと思うが）概念の混乱や論理展開の飛躍、解釈の強引さもそれなりに目立った研究が多かった。例えば、Ｂ１では潜在的カリキュラムにおける「かくれた作用」の言説空間を批判的にとらえようとする研究意図とマートンの潜在的機能の概念が一致するのか否かの検討が必要であるし、Ｂ３ではその刺激的なタイトルに比べてラベリング論の解釈の曖昧性のためにテーマに迫る結果が得られていない。また、Ｂ２とＢ４は、いずれも詳細なインタビューや状況の記述によってテーマに迫ろうとしているが、現状の解釈の次元を理論的な次元のどの層において説明しようとしているのかが不明なために、反証可能性の水準が広範囲にわたって展開される可能性があり、研究視点の絞り込みが必要であろう。

だが、本セッションの各研究の可能性は、このような批判を甘んじて受けつつもそれに止まる限界を有しているわけでは決してない。スポーツ社会学に体育社会学的アプローチの必要性と可能性の端緒を切り開こうとする点で、これらの研究の発展を切に望みたい。

**〈会場 C〉座長：松田恵示（東京学芸大学）**

**型と身体： 能楽と武道の比較において**

服部　直　（龍谷大学大学院社会学研究科）

**武道における精神性と身体感覚**

森山　達矢　（純真女子短期大学）

**共振する社会的身体――その①**

小谷　寛二　（福山平成大学）

**メディアにみられる子どもの身体観**

野村　徹　（東京学芸大学大学院）

本セッションでは 4 題の報告があり、いずれも「身体」をテーマにした興味深い報告であった。

まず、服部氏の報告では、現象学的な身体論を導き手として、「型」という概念を生成的な性質を持つものとして構築し直すとともに、能楽と柔道、弓道を比較し、その「タイプ」と「スタイル」と「フォーム」の重層的で力動的な有様に社会学的な言葉を与えようとするものであった。特に、「錯綜身体」と「制度身体」という身体の諸相の連なりと、日本の伝統文化に潜む「型」の固有の意味を紡ぎ合わせて、新しい「型」概念を拓こうとするところは、大変興味深い思索であった。

次に森山氏の報告では、武道における「身体感覚」の伝達について、報告者自身の体験にもとづいたフィールドワークを通じながら、特に当該の武道が持つ世界観=「精神性」の役割に着目して分析しようと試みたものであった。一般的に「精神」や「イメージ」は、「感覚」に対抗する性質を持つものとして理解されることも多い。こうしたなかで、むしろそれらが「感覚」を積極的に促し生起させ伝達する様を記述しようとするところに、本報告のポイントがあったわけである。

これに対して小谷氏の報告は、「共振する身体」というキーコンセプトから、身体の社会性を育む教育の意義と可能性をスポーツに見ようとする報告であった。ますます分化する傾向にある子どもたちの「言葉の世界」と「感覚の世界」の関係を深めさせたり、そもそも社会を成り立たせているコミュニケーションという営為は、「身体の共振」とりわけ同調性をベースにすることによって成り立っている。このような「共振する身体」を生起させ育てる場としてのスポーツの意義が報告では強調された。ボートを通じた社会実験など、体験の現場に身をおく小谷氏ならではの主張であろう。

最後に野村氏の報告は、一般に社会に分ち持たれている「知的能力」と「身体的能力」の優劣意識の存在を、テレビドラマのキャラクター分析から指摘しようとするものであった。本来、それぞれ単に2つの独立した「能力」であるそれらが、比較され優劣を問うものとして、すでに自明化している様を、特にドラマ「金八先生」を例にとり指摘するものである。「身体観」のひとつの様相として、ユニークな視点を展開するものであったと感じられた。

このように「身体」をテーマにした4つの報告は、多様な視点から、身体の社会性にアプローチしたものであり、今後の展開が期待される意欲的な報告であったように思われる。共通した課題がもし指摘できるとすれば、ひとつには、対象やテーマの面白さに見合った「研究視点」の絞り込みがより必要とされるかもしれないこと、また他方では、それにともなった概念や方法の精緻化が求められるのではないかと感じた。しかしながらそれらは、「身体」という不思議な対象を捉えようとするときに現れる共通の課題であり、今後さらにこの種の研究が、こうした課題に立ち向かいつつ、本学会において着実に積み重ねられていくことを望みたい。

**〈会場D〉座長：森川貞夫（日本体育大学）**

**遊歩空間としての公園に関する研究　－日比谷公園を手がかりに－**

小坂　美保　（早稲田大学スポーツ科学学術院）

**1910-1920年代における女子のスポーツ活動とその意味**

**－茨城県立土浦高等女学校を事例にして－**

角田　聡美　（福山平成大学）

**戦時下における“体位低下問題”とスポーツ空間　－名古屋市の公園事業を事例として－**

高尾　将幸　（筑波大学大学院）

**中高年者の身体活動における社会的ネットワーク機能の差異に関する研究**

中山　健　（上智大学文学部　保健体育研究室）

大会前日の能登半島を襲った地震の影響を受けて初日の個人発表は聴き手の参加者が少なかったのはたいへん残念であったが、4 人の発表は熱のこもったものであった。小坂美保会員の「遊歩空間としての公園に関する研究―日比谷公園を手がかりに―」、角田聡美会員の「1910-1920 年代における女子のスポーツ活動とその意味―茨城県立土浦高等女子学校を事例として―」、高尾将幸会員の「戦時下における“体位低下問題”とスポーツ空間―名古屋市の公園事業を事例として―」はいずれも歴史的資料を用いての近代日本社会の形成期から戦間期にかけての歴史社会学的研究であった。最後の中山健会員の「中高年者の身体活動における社会的ネットワーク機能の差異に関する研究」は今後ますます進行する高齢社会における中高年者の介護問題を前提に身体活動実施・非実施による社会的ネットワーク機能の測定尺度の可能性・妥当性を検討するものであった。

前 3 人の発表に共通して感じられた問題点は「空間論」「ジェンダー論」的視点からの歴史的事実ないしは事象に対して「資料自らに語らせる」というよりはそれぞれの視点からどのように読みとれるか、解釈できるか、その可能性について述べられたといえるが、その点についてはやや説得性にやや欠けていたのではないかと思われる。その意味では新たな資料の発見・発掘とテキストクリティークをふくむ方法論での精緻さが求められるように思われたがいかがであろうか。

最後の中山会員の発表についてはデータ処理および調査の手法にはかなり技術的・専門的に長けているが、「社会的ネットワーク」「社会的関係資本」論については北米圏とは異なる北欧圏の社会民主主義的な市民社会形成に関係する同様の用語の使用が行われており、今後の高齢社会における中高年者の社会的機能・役割と身体活動との関連が問われているのでこれらとの関係もふくめていっそうの理論的研究の深まりが必要のように思われる。

いずれも求められている課題・問題点は高望み過ぎていると思われるかも知れないが、若手研究者の続出に期待がこめられていることを了とされたい。

**〈会場Ｅ〉座長：西山哲郎（中京大学）**

**ストリートダンスの世界**

小竹　瞬　（奈良教育大学大学院）

**B-Boy for life? The Evolutional Track of Street Dance in Taiwan**

Wu, Sheng-Chi　(National Taiwan Normal University)

**The Relationship across the Taiwan Strait and the Bidding of Mega-events in Taiwan-a Strategic Relations Perspective**

Hung -Yu LIU (Department of Leisure Management Ming Hsin University of Science and Technology Taiwan)

本年度は台湾から大勢の発表者がやってきてくれたおかげで、一般発表で英語の報告があちこちで聞かれた。来年度以降がどうなるかは定かではないが、こうした知的交流が望ましいことは言うまでもなく、「次はこちらから出かけてみようか」という思いを抱いた会員も少なくなかったと思

う。

さて、一般論としては素晴らしい機会であるとはいえ、個別のセッションを考えてみると多言語状況への適応は容易ではなかった。特に、本セッションのように英語と日本語の発表が混合して行われる場合は、心の準備のなかった日本語使用者側に戸惑いがなかったと言えば嘘になるだろう。もともと本学会の特徴として、ひとつのセッションにおける発表者の組み合わせはあまり厳密な整合性を求めていないように感じていたが、今後もこのような多言語状況が期待されるなら、発表者同士の交流を促進するためにも、英語のみ、あるいは日本語のみのセッションより発表者の組み合わせにご配慮いただければと思う。

そんな前置きはさておき、本セッションの個別発表についてコメントすると、まず小竹瞬氏の「ストリートダンスの世界」については、ご本人もその世界に関わっているだけに、具体的な観察からの興味深い示唆が数多く見受けられた。その一方で、せっかくの観察が理論にあわせて悪い意味で修正されてしまったようなところもあったように思われる。大先生の理論を利用する場合、それに忠実であろうとするあまりに現実をそれに合わせて解釈する傾向が強まってしまうのはわかるが、ウェーバーが「原型」について語った台詞のように、理論はあくまでそれと現実とのズレを自覚して用いるべきものであろう。理論に合わない事実を処理できるように元の理論をモディファイしていく作業は、確かに何が許されるかの判断が微妙で、困難ではあるが、若い小竹氏にはどうか次回は失敗を恐れず大胆にやってもらいたい。

次に Wu, Sheng-Chi 氏の ”B-Boy for life?: The Evolutional Track of Street Dance in Taiwan.” については、これもご自身がダンスに関わって来られたために、具体的な描写に魅力があり、その上、時代的な変遷にも目配りした好発表であった。しかしそこで採用された歴史観としての “The Evolutional Track” については、評価の分かれるところかも知れない。最近、心理学でもてはやされていると聞く「進化論的」展開だが、社会学風に「自然史的」展開と表現すれば違和感もいくぶんかは低減するだろう。理系的な発想から歴史を必然の積み重ねとして理解すれば、こうしたアプローチには言語の壁を越えた普遍性というメリットが確かに存在する。だがその一方で、社会学の文脈では伝統的な歴史の個別性に関する主張との衝突を避けることは難しい。

最後に、Liu, Hung-Yu 氏の “The Relationship across the Taiwan Strait and the Bidding of Mega-events in Taiwan: a Strategic Relations Perspective.” については、国家政策のなかに組み込まれたスポーツメガイベントに関して、台湾の事例（と若干の大陸中国の事例）をその現場から報告してもらえた。その資料的価値は紛れもなく貴重なものであったが、フロアから政治的な解釈を求められた際に、そうしたものの議論自体を否定されたことは、評価が難しかった。こういうすれ違いは、はたして言語の問題なのか、研究風土の違いなのか、それとも政治風土の違いなのかは、にわかには判別しがたいが、こちら側に異を唱える具体的な資料がない以上、ひとまずは発表者の言を信じるべきだろう。とはいえ、今回のすれ違いを刺激として、日本の研究者が日本的な（あるいは悪く言えば西洋からの受け売り的な）スポーツの政治学を志向し、実施することがあっても、それはそれで学術的に楽しみなことである。実際に、そういう研究展開があった時にこそ、今回の多言語状況的セッションが組まれた意義も最大限に実現されるのではないだろうか。

## 一般発表Ⅱ

**〈会場Ａ〉座長:坂上康博（福島大学）**

**台湾甲組棒球に関する研究**

林　伯修　（台湾師範大学運動與休閑管理研究所）

**Our memory, Our baseball, the Taiwanese Collective Identity**

Li-Wei Hsu　(National Taiwan Normal University)

**A Sports Hero's birth -- The Deconstructing of Chien-Ming Wang Phenomenon**

Liao Yung　(National Taiwan Normal University )

国立台湾師範大学から参加された３名の元気な若い研究者による報告は、いずれも台湾の棒球（野球）をテーマとしたものであった。

１）　林伯修（リン・ボショ）「台湾甲組棒球に関する研究」

林報告は、台湾のアマチュア野球のトップに位置する台湾甲組野球に関するものであった。台湾甲組野球には、2006 年現在 14 チームが加盟しているが、これらのうち軍隊チームと企業チームが各１で、残り 12 チームすべてが大学野球部で占められている。林氏はこの 12 の大学野球部をさらに２つに分類する。12 の大学野球部のうちの６つが企業とのスポンサーシップ関係を結んでいるが、こうした関係を林氏は「建教合作」と呼び、これらの野球部を「建教合作野球チーム」と呼ぶ。それは大学野球部が企業から資金的援助（学費および運営資金）を受け、これに対して大学野球部は、企業名の入ったユニフォームで大会に出場し、企業の宣伝を行なうというものであり、その嚆矢が輔仁大学野球部と葡萄王（清涼飲料水会社）とのスポンサーシップ関係の締結であり、これが「建教合体」のモデルとなった。

他方、上記のような企業とのスポンサーシップ関係をもたない、６つの大学野球部が存在しているが、それらを林氏は「大学野球チーム」と呼ぶ。そのうちの５つが私立大学の野球部であり、これらは大学の宣伝を目的として設立・運営されている。例外なのが唯一の国立大学である嘉義大学野球部だが、同部は野球の強豪校としての歴史をもつことから「大学の宝物」としての地位を獲得しており、大学側から年に 324 万台湾元の資金援助がなされている。

「建教合作野球チーム」の問題点として林氏が注目するのは、スポンサーシップ関係の脆弱性である。その実態は、ビジネスという観点からすれば厳密な意味でのスポンサーシップ関係と言い難い。台湾において「建教合作」のモデルとなり、また、台湾のプロ野球選手の約半分を輩出してきた輔仁大学野球部も、スポンサー企業が昨年撤退した。こうした事例に示されるように、台湾の「建教合作」は、経営者の「人情」等に依存したもの、あるいは企業からの「寄附」といった色合いが強いものであり、相互の利益交換による「よい協力関係」を構築するには到っていない。その背景には、台湾甲組野球のメディアヴァリューの低さや市場規模の狭さといった問題があると指摘する。林報告に対するフロアからの質問は、甲組野球の実態に集中したが、質疑応答を通して以下のような点が明らかとなった。甲組というのは、甲と乙のランク（1 部と 2 部と同じ）のうちの甲という意味であり、甲組の所属チームはレベルが高く、練習がほぼ毎日行われている。甲組に加入登録するには審査が必要であるが、チーム数に制限があるわけではない。かつては企業チームも多かったが、経済的な事情により撤退し、また、陸・海・空の３チームあった軍隊チームも、現在はひとつだけになった。また、台湾では多チャンネル化が進んでおり、したがってそもそも高い視聴率が望

めない。これもスポンサーの確保が困難な一因となっている。

以上が林報告および質疑応答の概要である。台湾の野球事情に疎い私には、そのほとんどがはじめて聞く貴重な情報であり、あれこれ興味を掻き立てられたが、大学野球部と企業との関係に関しては、ビジネスという観点からだけでなく、林氏が指摘する「人情」や「寄附」のもつ社会的文化的意味に肉薄することも面白いのではないだろうか。そのことによって、「台湾式スポンサーシップ」のより本質的な特性が見えてくるように思う。そんな感想をもった。

２）Li-Wei Hsu,Our memory, “Our baseball, the Taiwanese Collective Identity”/許立緯（シー・リイウェイ）「われわれの野球、台湾の集団的アイデンティティ」

台湾出身のメジャーリーガー、王建民（ワン・チェンミン）選手。1980 年に台湾台南市に生まれ、台北の高校、大学（台北体育学院）を経て、2000 年にニューヨークヤンキースとマイナー契約。2005 年にメジャーデビューを果たし、ニューヨークヤンキースの投手として 2006 年には、190 センチの長身から投げ下ろす 150 キロ台の速球とシンカーを武器にリーグトップタイとなる 19 勝を挙げ、一躍台湾の国民的な英雄となった。

許報告は、この王建民選手の大リーグでの活躍やワールド・ベースボール・クラシックでの台湾代表チーム（Chinese Taipei）の３位入賞、さらにはアジア大会で日本を破っての優勝――それらによる台湾国内の熱狂ぶりを、メディア報道の分析とインタヴューを通して考察したものである。考察の焦点は以下の 4 点である。台湾の集団的アイデンティティは、①いかに形成されるのか、②なぜ野球と結びつくのか、③その生命力は永久的か、④台湾メディアが対日韓野球戦に力を注ぐのはなぜか。

台湾人とは誰であり、何に所属しているのか？　台湾人のアイデンティティは、中国との関係や国際社会の中での位置、エスニシティや支持政党などによって表明され、あるいは規定されるきわめて多義的であいまいなものである。こうした前提的な理解の上に立って、許氏は、メディアが王選手を「台湾のスーパーヒーロー」に祭り上げた背景として、国内の政治経済状況に対して人々が希望を失っていることに注目し、そうした状況と一体の関係で王選手が国民の希望の星となったのだという。また、それは現実からの「避難所」(Deford 1985)であり、人々はそれを欲しているとみる。

なぜ野球なのか、という点に関しては、野球場は歴史的にみて、台湾人のアイデンティティをつくり出す重要な場であったこと（Chang Li-ker)、また、野球が世界的にはマイナー競技であり、台湾が国際レベルにおいて勝利できる可能性をもつ、という指摘が回答となっているように思う。こうして許氏は、台湾が国際社会で明確な地位を築き、２つの政党間での抗争がなくなり、エスニックグループ同士の敵対心がなくなるといった変化が訪れない限り、台湾の集団的アイデンティティの形成にとって野球は重要な役割を果たし続けるだろうと結論づける。

【質疑応答】

Q：台湾のナショナルアイデンティティの歴史的な変化との関連の中で、王選手の国民的英雄化をどうとらえるのか？　国際関係において台湾が孤立状態にあった時期と現在とでは変化があるはず。

A：変化としては、かつては「中国人」という意識が強かったが、それが「台湾人」という意識に変わった。また、台湾のメディアは、かつては国家統制下にあり、政府がコントロールすべきものであったが、こうした事態も解消された。このような大きな転換があり、それは個人的な

体験とも重なっている。

Q：たとえば、イチローの大リーグでの成功に対して、日本人は「日本野球の成功」といった評価をするが、王選手の場合はどうか？　台湾のプロ野球を経由しないで渡米し、マイナーリーグからメジャーへと登りつめた王選手の場合は、「台湾野球の成功」という評価にはならないのでは？

A：日本のプロ野球とはちがって、台湾のプロ野球は賭博問題など多くの問題を抱えているという点がポイントだと思う。

以上が許報告と質疑応答の概要である。許氏は「集団的アイデンティティは一種の集団的な記憶――王選手や代表チームのすばらしいプレー！――でもある」と指摘しているが、「記憶」は永遠であり、それが人々のあいだに築く感情的な絆などについては、台湾社会のネガティブの側面からだけでは評価できないものを含んでいるのではないか。報告全体がきわめてシャープであっただけに、この点が少し気になった。

３）Liao Yung, “A Sports Hero’s birth; The Deconstructing of Chien-Ming Wang Phenomenon”/廖邕（リィアオ・ヨン）「スポーツヒーロの誕生：“王建民現象”の脱構築」

スポーツヒーローと社会的価値とが一体性な関係にあること等については、これまでの研究において指摘されているが、台湾におけるスポーツヒーローについての事例研究やその形成に関する研究は充分にはなされていない。廖氏の報告は、研究状況をこのように総括した上で、“王建民現象”をスポーツヒーローというコンセプトのもとで構造解析しようとする試みである。

昨年の大リーグにおける王選手の活躍は、台湾に熱狂を巻き起こし、王選手は「台湾の魂」と呼ばれるようになった。こうした“王建民現象”の出現は、以下のような相互に関連する４つの要素によって支えられている、というのが本報告の結論である。

①メジャー19 勝、防御率 3.63 といった王選手の 2006 年シーズンの業績と彼の野球技術。②メディアによって表示された彼の申し分のない性格や人物像。それは台湾社会が失った価値のいくつかを回復させるものとして受容されていること。③メディアと政府による増強。メディアは彼に関するすべての情報を追跡・報道し、台湾総統はスタジアムに自ら赴いて彼を絶賛し、教育省は彼に最高位の賞を与えた。④彼の活躍による国民的な自信（national confidences）の高まり。アジア人としての最多記録である 19 勝などのニュースは、人々を誇らしげに、また愉快にさせ、台湾の人々をアジアのトップに立っているような感覚にさせた。

【質疑応答】

Q：台湾メディアはどのような社会的価値を王選手に背負わせているのか？

A：それは現在形成途上にあり、まだ明確な形をとっていない。

Q：“王建民現象”をアメリカを中心とするグローバルな資本の戦略の中での現象としてとらえるべきではないのか？

A：今回の報告ではその点を中心的なテーマとしていないので検討の対象とはしなかったが、重要なポイントであると思っている。

上記のひとつ目の質問に関して廖氏は、抄録の中で、王選手を台湾が失いつつある伝統的な社会的価値の体現者としてとられているように思う。また、当日の報告では、先輩後輩関係という日本的な伝統的価値を例に出し、イチローとの共通点を指摘されたように思う。本論からズレてしまうが、この点に関してコメントしておきたい。

私の理解では、王選手とイチローの両ヒーローが体現している社会的価値は、対照的といっていいほど異なっているように思う。王選手が体現している（台湾メディアが背負わせている）社会的価値が、他者や集団との調和や自己抑制を求めるいわゆる集団主義的なものであるのに対して、イチローが体現している社会的価値は、そうした既成の価値からは自由な、あるいはそれを越えていくいわゆる個人主義的なものであり、それはバブル経済が崩壊し、もはや集団主義や根性主義では日本経済の再生は不可能となり、従来の枠を越えた自由で創造的な発想などが求められるようになったという日本社会の変化と一体となったものであるように思う。

以上の３つの報告を聞きながら、もっとも興味をかき立てられたのは、野球をめぐる日本と台湾の比較研究である。それによって、日米野球比較では光が当たることがなかった日本野球の特性が浮かび上がると同時に、台湾野球の特性もより鮮明になるのではないだろうか。そんな研究が共同でできれば楽しいと思う。

なお、許・廖両氏の報告内容については、抄録の内容を中心にまとめた。当日パワーポイントを用いたより詳細な報告がなされたが、英語であったため、充分にフォローできなかった箇所が多々ある。この点ご容赦願うとともに、両報告の質疑応答の台湾語通訳を買って出てくれた林伯修氏にこの場を借りてお礼申し上げたい。

**〈会場Ｂ〉座長：高橋義雄（名古屋大学）**

**Study of the marketing of Keelung Jung Yuan Festival（基隆中元祭）**

Guo, Ya-Ting (National Taiwan Normal University)

**The Research on participant motivations of consumer、consumer behavior and consumer satisfaction in fitness center. A case study of Taipei city Betiou sport center**

Wang lin-kai （National Taiwan Normal University ）

**A Research on social development of the soccer participant in Taiwan**

Jia-Jahng Guo （National Taiwan Normal University)

担当セッションの発表３演題は、ともに台湾から参加した大学院学生であった。質問は英語で行われたが、日本語を通訳できる学生が参加してくれたために、議論も活発に行うことができた。学会大会の国際化へむけ、よい経験となった本セッションであった。さて、発表内容であるが、

１）Study of the marketing of Keelung Jung Yuan Festival （Guo, Ya-Ting）では、19 世紀半ばより 152 年続いている台湾の祭りについて発表がなされた。インタビュー調査で得られた結果では、祭りの財政的な課題、ツーリズムと祭りの融合によるマーケティングなどについて発表がなされた。日本人参加にむけ、写真を豊富に利用しており、日本人研究者からは中華街で行われている祭りとの類似について感想や、祭りの社会的な機能について質疑がなされた。

２）The Research on participant motivations of consumer, consumer behavior and consumer satisfaction in fitness center － A case study of Taipei city Betiou sport center (Wan lin-kai) は、台北のスポーツ施設の利用者に質問紙調査を実施し、その結果を分析したものである。結果では、利用者が「健康の維持増進」や「達成感」を求めていることが示された。また施設が清潔であ

ることや衛生的であることを求めていること明らかにされた。

３）A Research on social development of the soccer participant in Taiwan (Jia-Jahng Guo) は、台湾ではマイナーなスポーツであるサッカーについて、サッカーを実施している５人に対してインタビュー調査したものである。サッカーを通じて、友人を作り、個々人の差異を認識しつつも、チームワークを大切にすることの理解が進んでいるとの報告であった。質疑では今後の本研究をどのように発展させていくのかについて意見交換がなされた。

最後に、３名の方々が、日本スポーツ社会学会での経験をいかし、さらに研究を深めていくことを期待したい。

**〈会場 C〉座長：平井肇（滋賀大学）**

**A study in role conflict of semi-professional student players Students in Super Basketball League and NTNU basketball team as a example**

Cheng-Hsiu,Tsai （National Taiwan Normal University）

**Study on Current Status of the Retired Professional Baseball Players in Taiwan -With a Focus on the Trace Investigation of Retired Players**

**台湾プロ野球選手の引退後の現状についての研究　一引退した選手の追跡調査を中心として**

朱　文増 （台湾師範大学スポーツとレジャー経営研究科）

**The comparison of the developments of therapeutic riding between Taiwan and Canada. -The cases of Northern Taiwan and Western Canada**

Tzeng Chien-chun (National Taiwan Normal University)

*A study in role conflict of semi-professional student players: Students in Super Basketball League and NTNU basketball team as an example*. Cheng-Hsiu Tsai, National Taiwan Normal University, Taiwan.

本報告は、台湾師範大学のバスケットボール部員の事例を取り上げ、大学の運動部で活動をしながら、セミプロ契約をして学外のチームでプレイする台湾のバスケットボール選手の実態と背景、彼らが抱えるロールコンフリクトについて論じたものであった。このシステムは、大学とセミプロチームでの練習や試合が重なり、また学業との両立の点からしても問題が多い。日本では選手の二重登録を認め、同じ大学の選手が別の試合では別のチームに所属して戦うことなど想像できないが、台湾では可能なのだそうだ。その背景には、選手層の薄さ、経済的動機、大学の運動部の成績が大学院進学に関係している等、さまざまな理由がある。しかし、報告者が指摘したように、選手が立派に両立することはきわめて困難であり、身体的な面だけでなく、精神的な面においても大きな問題を含んでいると感じた。日本の大学スポーツでも、プロとアマの垣根が低くなっている。今後、このようなケースが生じることはあり得る。台湾のケースが先行例になるかも知れないと感じた。

*Study on current status of the retired professional baseball players in Taiwan: With a focus on the trace investigation of retired players 台湾プロ野球選手の引退後の現況についての研究：引退した選手の追跡調査を中心として* Wen-Tseng Chu　朱文増　National Taiwan Normal

University, Taiwan　台湾師範大学

本報告は、台湾のプロ野球界に在籍した元選手の引退後について追跡調査を行った結果をまとめたものである。引退後の職業として回答者の中で一番多かったのが、学校でのコーチの職で、球場の管理などに携わる台北市の市職員も多くいた。彼らの多くは、プロ野球選手としてのキャリアが現在の職を得るのに有利に働いたと考えている。ほとんどの元選手が現役時代の収入には満足しているが、引退後の生活には十分ではないと回答している。８割以上の人が、引退後、収入は減少したと答えている。ほとんどの元選手がプロ野球観戦を続け興味を持っているが、子供が野球選手になることには慎重である。台湾は野球が盛んであるが、娯楽産業として野球、職業としての野球の地位はまだ十分確立されておらず、課題も多いと感じた。本報告のような、(元)選手に焦点を当てた研究が今後も増えることを期待したい。

*The comparison of the development of therapeutic riding between Taiwan and Canada: The case of Northern Taiwan and Western Canada,* Tzeng Chien-Chun, National Taiwan Normal University, Taiwan

本報告は、台湾とカナダの乗馬セラピーを比較し、乗馬セラピーが発展段階にある台湾の今後について課題を整理しようとしたものである。筆者によれば、両国とも同じような歴史的経緯を経ているが、大きく違う点はカナダでは統一された統括団体の下で組織化されているが、台湾ではそのような団体がない。わずかな数のNPOの活動に依存しているために、資金の調達や馬の管理などで困難も多い。台湾特有の気候の問題もある。報告者は、台湾の乗馬セラピーの発展のためには、関係するNPOの統合、支援ボランティアーの確保、屋内施設の建設、海外のスペシャリストの招聘や文献の翻訳等を挙げている。報告を伺っていて、特別な助けを必要としている人に動物との交流が大切であることは再認識したが、係わる人や組織、資金の問題、気候や地理的条件等の課題が多い現実も知った。

**〈会場D〉座長：リー・トンプソン（早稲田大学）**

**The Research on Super Basketball League Players' Values of Games**

Jun-hao Hu　(National Taiwan Normal University Graduate Institute of Sports and Leisure Management)

**The Content Analysis of Gender of News Reporters in Sports Coverage -An Example of 2006 DOHA Asia Games**

Chen-Wei Lo　(National Taiwan Normal University、Taiwan)

**A Study on Media Relations Strategy of the Sport Brand - take adidas originals in Taiwan for example**

Chia-Pei Huang　(National Taiwan Normal University)

A Study on Media Relations Strategy of a Sport Brand: adidas originals in Taiwan
Chia-Pei Huang, 国立台湾師範大学

発表者は、台湾におけるアディダス社のブランドの一つであるアディダスオリジナルスのメディ

ア戦略を分析した。研究の目的は１）会社側のPR戦略を明らかにすること、２）そのPR戦略をターゲットオーディアンスにメディアを通じてどう伝えるかを理解すること、３）ターゲットオーディアンスの頭のなかのイメージをとらえること、の３つであった。

目的の１と２に関しては、台湾担当のプロダクト・マネジャーとのインタビューに基づいて、ターゲットオーディアンスや伝えようとしているイメージ等、つまりマーケティングについて報告された。筆者が関心をもったのは、アディダス社が重視しているメディアは雑誌だ、という話しであった。それは、テレビ CM を多く流す予算がないことも影響しているが、それよりもお客さんは雑誌を店に持って行き、広告や写真を店員に見せ買い求めるということである。

メディア研究としてみた場合、この研究の独自性と将来性は、送り手の意図と受け手の反応との関連を調べているところにある。発表者は１０人の２０代の男女にアディダスオリジナルスのイメージについて調査した。その結果、PRとオーディアンス認識の間にずれがあることが分かった。これは興味深い指摘である。ただし、そのずれとはどのようなものなのかについて、質疑でも話題になったが、少し分かりにくかった。誤解しているかもしれないが、プロダクト・マネジャーが狙っているのはハイファッション（高級品？）のイメージに対し、ターゲットオーディアンスがもっているイメージはヒップホップである、ということだろうか。

The Content Analysis of Gender of News Reporters in Sports Coverage:An Example of 2006 DOHA Asia Games　　Chen-Wei Lo, 国立台湾師範大学

男性に較べて女性のスポーツ記者は極端に少ない。欧米での研究で女性記者は全体の約１割しかいない。日本ではもっと少ない。この偏りは女性スポーツ報道の量と質に影響を与えている、と指摘されている。

発表者は、台湾のスポーツ報道を分析し、記者の男女比と記事の男女スポーツの割合を調べた。対象は２００６年アジア大会（ドーハ）期間中（１１月３０日から１２月１７日）における台湾の主要な新聞社３社のスポーツ報道であった。

記事を執筆した記者２３人の中に男性は１６人（７０％）に対して、女性は７人（３０％）しかいなかった。しかし、記事７０３点中、男性記者の記事は５５９点（７９．５％）であったに対して、女性記者は１４４点で２０．５％だけであった。つまり、女性記者の割合より、その女性記者が書いた記事の割合が低い、ということである。

また、女性記者は女性スポーツについて多く書いたというわけではなかった。男性記者の記事の中で、女性スポーツに関するのは１６４点（２９．３％）であったのに対して、女性記者の記事の中で、女性スポーツに関するのは３９点（２７．１％）であり、男性より低い。（その差は有意義ではないが。）

男性スポーツについての記事に関しては、男性記者と女性記者の間に有意の差があった。男性記者の記事の男性スポーツの割合は５８．１％に対して、女性記者の男性スポーツ記事割合は４２．４％であった。（残りの記事は男女両方が登場するか、選手が登場しない施設の描写など。）バスケットのように、メダルが取れそうになって初めて大きく取り上げられた女性スポーツもあった。

台湾についてのこうした研究はこれまであまり発表されていないと思う。発表者は女性記者の少なさを指摘していたが、欧米や日本と比較して却って多いとも言える。

The Research on Super Basketball League Players' Values of Games

Jun-hao Hu, 国立台湾師範大学

台湾におけるバスケットボールの現状を紹介しながら、その最上のリーグ、セミプロリーグのスーパーバスケットボールリーグの選手の「労働価値観（work values)」と、その形成に影響を与えた要因を明らかにすることが目的の研究である。

台湾のバスケットボールリーグには高校、大学、そしてセミプロのスーパーバスケットボールリーグ（SBL）という３つのレベルがある。SBL は２００３年１１月に形成され、大学生のチーム所属が認められている。発表者は SBL の一つのチームの６人の選手にインタビューし、Wollack (1971) の「労働価値観」の７つの要素を基準に、選手の労働価値観を分析した。

選手の労働価値観の形成要素として家族と学校とチームの３つをあげた。高校のレベルでは、この３つの要因全てが影響を与えるが、大学のレベルでは学校とチームの２つだけ、そして SBL のレベルでは影響を与えるのはチームだけ、と報告した。

プロ選手の労働価値観の調査は有意義であるが、その結果はいささか平坦である。例えば「達成感が得られる」というのは、調査しなければ分からないことなのだろうか。そして、形成要因に関しては、SBL のレベルでは果たして家族が影響を与えないのか、とも思った。

日本のスポーツ社会学会での発表であったので、台湾の現状をもう少し丁寧に説明してほしかった。そして、台湾の特徴とは何か、比較の視点があってもよかった。

**〈会場Ｅ〉座長：橋本純一（信州大学）**

**大衆文化としてのプロレスはいつ終焉したのか。**

岡村　正史　（大阪大学大学院人間科学研究科）

**言語学からみたスポーツ実況中継**

清水　泰生　（(社）日本マスターズ陸上競技連合）

【大衆文化としてのプロレスはいつ終焉したのか。岡村正史（大阪大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程)】

岡村会員はプロレスに関する大衆的人気がどのように変化してきたのか、あるいはそれがプロレスに対する知識人の評価とどのように関係していたのかということを探り、そこからポピュラー文化としてのプロレスがいつ終焉したのかを明らかにしようと試みた。

その手始めとして、読売新聞や朝日新聞の世論調査、NHK の「テレビ番組意向調査」などを拠り所にしながら、プロレスは街頭テレビの時代には絶大な人気を誇っていたのはもちろん、ミッチーブーム以降も６０年代末まではテレビでも人気番組（街頭テレビ→近隣テレビ→お茶の間テレビ）であり、その名残は７０年代まで見られたとしている。８０年代以降はサブカルチャー的ジャンルと化し、８８年のゴールデンタイムからの撤退はその傾向を決定付けたという。その後プロレスはライブ中心の都市型興行に転じ、K-1 等の格闘技人気の裏でおたく文化化したとする。また、ロラン・バルトや村松友視の著作を検討して、知識人あるいは知性的と自認するプロレスの愛好家の心性にかんして考察した。多くのプロレス関連記事やプロレス愛好家の文献に当たりながら、人気や知識人との関係の変遷を精緻に分析したのである。そして標題に掲げた目的に関しては一定の成果を得たと思われる。ただ社会学的パースペクティヴ という点からすると、大衆文化としてのプロ

レスが「いつ」終焉したのかというかことよりも、「なぜ」終焉したのかという課題の方が重要かつ意義深いのではないだろうか。報告者の一連の研究の中で是非明らかにしてほしいと感じた。

【言語学から見たスポーツ実況中継　　清水泰生（日本マスターズ陸上競技連合）】

清水会員は冒頭で、スポーツ実況中継に関する分析はスポーツ社会学、メディア研究、カルチュラル・スタディーズなどの分野で行われているが、言語学からの分析は、自らの論文の他には１本しか見あたらないと述べる。そして、本発表では、「言語学からスポーツ実況中継の研究をする価値、意義について述べ、スポーツ社会学等への応用を提言したい」とする。特に、スポーツ社会学でこれまであまり問題になっていない点、「音声」にスポットを当て、それがスポーツ実況中継の考察に役立つことを明らかにしようと試みた。具体的には音声学で用いられる音響分析、イントネーション分析、プロミネンス・休止・りきみ・すすり・リズム等に関する分析を、スキー・ジャンプ、水泳、競馬、陸上中距離等の録音データを素材にして試みた。結論として、「言語学や音声学の視点を取り入れることにより、データの信頼性が増し、社会学的信頼性も増すのではないか。言語学の研究手法、特に音声学の手法は、実況中継、スポーツ社会学に応用する価値がある」とした。確かにこれらの手法を駆使した分析により、絶叫調や平板調における差異を明らかにしたのは評価できるのであるが、それらの手法がこれまでスポーツ社会学では見られなかったのは、その必要性に懐疑的だったことからくるのかもしれないともいえる。研究の社会学的意義という視点から再考した時に、はたしていか程のものなのか、また、真にラジカルな試みと言えるのか、そのあたりの疑問を拭い去ることができなかったのは残念であった。

**〈会場Ｆ〉座長：藤田紀昭（日本福祉大学）**

**スポーツ＜ボランティア＞はボランティアか**
**－ボランティア論からのアプローチと定義の再考－**

森　政晴　（駒澤大学大学院）

**生活構造から捉える障害者とスポーツ**

後藤　貴浩　（熊本大学）

「スポーツボランティアはボランティアか－ボランティア論からのアプローチと定義の再考－森政晴（駒澤大学大学院）」では、旧来のスポーツボランティアの定義には日常的なスポーツサポートボランティアとイベントボランティアの区別がなされていない等の問題点があることを指摘し、新たな定義づけを試みる内容であった。その中で指摘された「動員されるイベントボランティア」の実態やイベント主催者からみて「従順なボランティア」「安上がりの人材」としてのボランティアの指摘は重要である。しかしながら、ボランティア論そのものへの切込みがやや甘く、ボランティアの分類や特徴に関する理解が十分で内容に思われた。イベント主催者の横暴により盛り上がりつつあるスポーツボランティアの火を消さないためにも、ボランティア論そのものからのスポーツボランティアの定義と意義付けが期待される。幸い発表者自身様々なスポーツボランティアを経験しているということなので、そこでの経験を生かした地に足のついた研究を期待したい。

生活構造から捉える障害者とスポーツ後藤貴浩（熊本大学）は障害者とスポーツの関係をみてい

くこれまでの研究視点に障害者と生活の視点を加味し、障害者の生活とスポーツのあり方を丹念なフィールドワークをもとに明らかにしたものである。個人情報保護法施行以来、障害者のプライバシーに立ち入った調査は特に難しくなってきている。そうした状況下でこれだけの調査資料を収集されたことにまず驚いた。調査対象となった地区の障害者の生活構造からは比較的上層で運転免許を持つなど流動性が高い人のスポーツ実践率が高いこと、社会活動に参加するなど公共化傾向が強く、健康に対する同調性の強い人ほどスポーツを行う傾向にあること。市街地に住む人や施設入居者では地区での人間関係の維持形成がスポーツ実践に不可欠であることが明らかにされている。障害者スポーツセンターなど障害者スポーツ専用施設がない地域での実態が明らかにされていて大変興味深い。また、障害者のメインストリーミングを声高に叫ぶまでもなく、地域の中で障害者のスポーツ実践が自然に包摂されている姿に驚かされた。緻密なデータをもとにして障害者スポーツセンターがないとスポーツ参加できないなどの常識に一石を投じる研究となることを期待したい。

## 一般発表Ⅲ

**〈会場 A〉座長：岡田桂（関東学院大学）**

**海外への武道の普及に関する一考察**

**―1910 年代のパラグアイにおける柔術の受容を中心に-**

藪　耕太郎　（立命館大学大学院）

**Night club culture in Taipei**

Li Ho-Yu　(National Taiwan Normal University)

**第 3 世界における「パブリック・カルチャー」論の射程**

**―A.アパデュライの「インド・クリケットの脱植民地化」を中心にして―**

坂本幹　（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

本会場においては、主に、文化が国境を越えた際の変容という部分に共通項を設定する形でのセッションとなった。残念ながら、③坂本氏の発表は直前でキャンセルとなったため、①および②担当の２名による発表と、それに伴う議論が行われた。

藪氏の発表は、20 世紀初頭に日本からもたらされた柔術が、どのような形でパラグアイの社会に受容されたかという大変興味深いテーマを扱ったものであった。地域的にもあまり研究蓄積がない南米パラグアイという地域に焦点を定め、現地でのアーカイヴ調査などでもたらされた豊富な資料を用いた分析は、地域研究としても充分興味を引く内容であったと言える。柔術という非常に“日本的（ナショナル）”とみなされがちな文化が、パラグアイという大きく異なる文化的コンテクストの中でどのように受け入れられ、変容していったかについて、パラグアイ社会における「近代」経験と、戦争による文化的寸断という固有の社会状況に照らして詳細に検討がなされていると感じられた。

初期の柔術が、主に上流階層の人々が集う排他的なメンバーシップ制のクラブにおいて受容され

たこと、それが後に見せ物的な性格を帯びてエギジビジョンとして供されるようになる点など、これまでの他地域における柔術受容の先行研究との比較からしても、多くの共通点、そして興味深い差異の双方が見いだされる。近代における武道のグローバル化を考える上で、更なる視角を提供すると共に、これまでの「正史」としての柔道（柔術）受容史にあらたな可能性を付け加える一考察ともなる内容であった。

続くリー氏の発表は、現代の台北におけるクラブ・カルチャーについての考察であった。氏の調査したクラブとは、現在の日本でのダンス／身体／サブカルチャーという興味・問題意識から連想される様な、ある程度アンダーグラウンドな音楽ジャンル別に細分化（ハウス、テクノ、ヒップホップなど）されたクラブ・カルチャーとは異なり、いわゆるパブ・ディスコ（？）あるいは音楽を供するバーという商形態である点は、いささか意外であった。

報告によれば、こうした種類のナイト・クラブの大きな特徴としては、女性に限り、定額を払えばアルコールやドリンクが飲み放題になることであるという。こうした点から、いわゆるフラーティングの場としてのナイト・クラブという状況設定とジェンダー差に関して議論が進むかと思われたが、基本的には数人のインフォーマントによる活動の動機と、こうしたナイト・クラブのシステム紹介に終始し、研究としての方針（問題設定と方法論、結論）が曖昧な感が否めなかったのは、少々残念であった。

クラブ・カルチャーに関しては、英語圏でもかなりの先行研究蓄積があるため、それらのレヴューを踏まえ、本研究がどのような部分に位置付くのかを明確にした上で、更なる調査・研究の進展を期待したい。

最後に、今後の学会における一般発表のあり方に関して申し添えておけば、やはり海外からの研究発表者をどのように位置付け、どのような一般発表会場に組み入れるかは、あらためて考える必要があると感じた。通訳者が付かない場合、日本語話者と英語話者の間では、やはり質疑応答や議論には困難がつきまとい、それぞれにとって必ずしも生産的であるとは限らないという印象を持った。二人目の発表の際、会場から多くの会員が退出してしまったことは、こうした状況を如実に表しているとも言え、これは発表者と学会発表に対するマナーという点でも、再考に値するのではないだろうか。

**〈会場Ｂ〉 座長：高橋豪仁（奈良教育大学）**

**遊び行為における役割の「重複性」に関する研究**

宮坂　雄悟（東京学芸大学研究員）

**“Wii 現象”とは何か? -ヴァーチャルスポーツのハイブリッド化の意味について-**

松田　恵示 〈東京学芸大学）

**The Game Generation in Taiwan: The Past,Present, and Future**

Chang Hung Chi （National Taiwan Normal University ）

宮坂氏は、遊び行為において、如何にして「没入」と「距離化」という異なる態度が同時に遂行されるのかということを、役割の重複性や役割距離に言及しながら論じられた。そして、フェアプレイも「没入」と「距離化」の両側面から捉えられ、それは焦点化された意識に基づく態度ではな

く、没入する意識を同時に距離化するという拡散化された意識こそが、フェアプレイの精神を生み出していると提言された。議論においては、距離化することで自らを客観化し自我の住処となることや、「拡散化された意識」とはどのように説明できるのか、本来意識は単数のものであるが没入と距離化という２つの意識が同時に起こっているメカニズムをどのように説明できるのかといったことについて質疑応答がなされた。知的好奇心を刺激する内容の発表だった。

松田氏は、Wii のインターフェイスが従来のラケットやバット等の本物を模したものから抽象化され意味を持たないリモコンに変化した点に注目し、それがゲーム体験にどのような違いを及ぼしているのかを論じられた。意味のない操作道具としての Wii リモコンは、「いま、ここ」性を薄め、「いま、あちら」性を強めることとなり、それは「いま、あちら」での同期体験を可能にし、メディアを通した拡張身体を生じさせていると解かれた。生身の身体を使ったスポーツやメディアを介したスペクテータースポーツと、こうしたサイバースポーツとの重層的な関係性について研究する必要性をWii 現象は示していると松田氏は主張された。フロアーからは、「それはスポーツなのか」、「結局実際のスポーツに近づけても同じものにはならないのではないか」等の質問が出された。それに対して松田氏は、実際のスポーツからバーチャルなスポーツへの移行という見方ではなく、メディア環境の変化に対応して新たな身体のあり方が生じてきているのであり、それをスポーツの重層性やダイナミズムとしてスポーツ社会学は研究すべきだと回答された。多くの聴衆を集めた松田氏の発表では、活発な議論がなされた。

Chang Hung Chi 氏は、1970 年代から現代までをゲームコンソールの変化に基づいて 5 期に分け、それぞれの時期の社会的背景と社会問題を提示することによって、台湾のビデオゲームの発展を分析された。ゲームの内容には不適切なものがあるので、今後は米国・日本・韓国のように、台湾でもレーティングによる制限を設ける必要がることを提言された。質疑応答では、台湾師範大学の林伯修先生にお手伝い頂き、英語だけではなく中国語と日本語も使って議論がなされた。台湾では全くゲームに年齢制限がないことや、アーケードゲームからビデオゲーム、そしてまたアーケードゲームからビデオゲーム、オンラインゲームへという変遷と賭博・パチンコの警察の取り締まりとの関係を知ることができた。レジャー研究として大変興味深い内容だった。

**〈会場 C〉 座長：佐伯年詩雄（筑波大学）**

**米国プロスポーツ研究における経験的・理論的パースペクティヴ**

大沼　義彦　（北海道大学大学院教育学研究科）

**内海和雄氏の理論についての考察**

荒川　和民　（スポーツライター）

**Looking inshight the phenomenon of Wang with the theory of cycle of culture**

Lee Shane chung　(National Taiwan Normal University )

本セッションは、大沼義彦氏（北海道大学大学院教育学研究科）による「米国プロスポーツ研究における経験的・理論的パースペクティヴ」、荒川和民氏（スポーツライター）による「内海和雄氏の理論についての考察」、そして Lee Shane Chung 氏（台湾師範大学院生）による「Looking insight the phenomenon of Wang with the theory of cycle of culture」の３の発表によって構成された。

タイトルから見れば、研究方法論を問題にするセッションのように思われるが、発表された研究内容は、必ずしもそれに対応するものではなく、その意味で、セッションとしてのまとめを統一的に整理することは困難である。従って、ここでは、それぞれの発表要旨を整理して報告する。

まず、大村氏の報告は「スポーツと地域研究」を射程にしながら、プロスポーツの地域活性化可能性を理論的・実証的に検討することを課題として、米国における先行的研究を整理し、その知見から、近年のわが国で盛んに主張されている「スポーツイベントによる地域振興」論の検討視点を提供するものであった。これによれば、スポーツイベントによる地域経済的活性化は実体的に多様な利害関係を内包しており、その利益が住民に還元されうるかどうかは極めて曖昧であること、またプロスポーツがコミュニティ構成の基盤としてのコムニタスを必ずしも形成しないこと等が示され、政策論的言説の学術的根拠の希薄さが批判された。氏は、そこから、これからの研究方向として、ルフェーブル的視点、つまりスポーツイベントにおける「空間の生産」を分析することの重要性を指摘した。上滑りな政策論に乗りがちな傾向を諫める極めて重要な示唆であり、次回報告が期待されよう。

荒川氏の報告は、「スポーツの公共性」の研究を軸にして、スポーツ政策論で活躍している内海氏のスポーツ論を検討し、内海氏のスポーツの構造的認識の重要性に賛同しながらも、そこに潜むダーウイニズム的視点、プレイ論の軽視、アマチュアリズムと肉体労働者の関係のとらえ方を批判的に検討するものであった。この報告では、批判の具体的対象とされる内海理論の言説も、また荒川氏の内海理論検討のパースペクティブも見えず、極めてわかりにくい報告であった。しかし、批判の根拠を、肉体労働者（警備員）のインタビュー調査から導き出そうとする努力は評価されよう。

Lee Shane Chung 氏の報告は、昨年、メジャーリーグで大活躍をして、一躍、英雄となった Wang 氏を取り巻く台湾社会の熱狂を「Wang 現象」として捉え、その現象生成過程を representation, identification, production, consumption, regulation の文化サイクル論によって分析したものである。Wang 現象は日本では余り知られていないことから分かり難いところもあったが、映像による紹介が有効に機能した。野茂から松阪にいたる日本のメジャーヒーローを考えるとき、Wang 現象は台湾社会の政治・経済・文化を表象する極めて興味深いものであり、会場における比較論的討議が期待されたが、聴衆は２～３名しかおらず、極めて残念であった。この報告のために海外からこられたことをかんがえると、タイムスケジュール等における配慮が望まれよう。

**〈会場 D〉 座長：松村和則（筑波大学）**

**The Research of Leisure-related Policies for The Elderly in Taiwan**

Yu-Jen Chen （Graduate Institute of Sports and Leisure Management）

**ボウリングブームに関する諸条件の考察**

笹生　心太 （一橋大学大学院社会学研究科）

１）Chen Yu-Jen( National Taiwan Normal University)

The Research of Leisure-related Policies for The Elderly in taiwan

高齢化する台湾の政策的課題として、高齢者の余暇活動を支援するための研究と位置づけられている。そのために、高齢者の余暇活動を構造的に妨げる５つの要因を Godbey(1991)の研究に従っ

て、①移動、②施設、③時間、④経済的余裕、⑤機会とした。これらの要因毎にそれぞれ検討し、①テクノロジーによって支援する。②共通性の高い、人気のある施設を増設、③高齢者に相応しい時間的配慮をする、というように具体的な提言をし、政府の努力は施設と機会の増加に集中してきたことを明らかにした。

２）笹生心太（一橋大学大学院修士課程）

「ボーリングブームに関する諸条件の考察」

今は懐かしい１９６０年代後半の「ボーリングブーム」がどのような社会的背景で起こったのかを明らかにしようとするものである。

①社会条件（レジャー・スポーツの有り様、ボーリングのイメージ）

②種目特性（手軽なするスポーツとして、見せるスポーツとしての女性ボーラー）

③関連団体（競技志向の JBC とエンジョイボーラーの場協会）

上記の３点から検討し、１９６０年代がレジャー・スポーツに対して政策的基盤が薄かった事に対して、民間資本がこのブームを支えたこと、関連団体はこのボーリング場の過剰供給を恐れて強くコントロールしていたことが結論として導き出された。さらに、このブームは、人々がお金を支払って余暇活動・運動（エクササイズ）を買うという生活スタイルの「先駆け」となったと結論された。

最終日の最終セッションであったことも手伝って、フロアには４～５人の聴衆がおられたが、「ままならぬ英語」と観光へのはやる気持ちで議論は低調であった。この学会の創設に係わった者として、どうしてもこの研究は聴いてもらいたいという熱意が伝わる報告であって欲しかった。金沢市生まれの司会者は、地元への観光・ツーリズムに協力することはやぶさかではない。

**〈会場Ｅ〉 座長：東元春夫（京都女子大学）**

**帰化選手に描かれる日本人の「境界」～サッカーでの言説を事例として～**

池端　宏之　（早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程）

**Ｊリーグにみる在日コリアンの民族アイデンティティ**

千葉　直樹　（浅井学園大学短期大学部）

**The cultural Implications of Sports movie in Native Taiwanese**

**- With movie (My Football Summer) for example-**

Wang Szu Hong　(National Taiwan Normal Unversity)

１）「帰化選手に描かれる日本人の境界～サッカーでの言説を事例として～」（早稲田大学大学院人間科学研究科・池端宏之氏）･･･日本人の境界を見出すために、日本サッカーにおける最初の帰化選手であるネルソン吉村の言説に日本人の「境界」が描き出されているのではないかと報告者は考え、『サッカーマガジン』に描かれる言説の分析を行った。日本人の「境界」に関して、吉野耕作が指摘する「シンボルとしての血統」、熊谷史が指摘する「日本人らしい人間性」、「日本への忠誠義務を全うすること」の三つの基準を設定し、言説を事例として検証を行なった。「血統」については帰化申請の前後で描かれ方が変容しており「シンボルとしての血統」を重視する日本社会が浮き彫りにされていること、「日本人らしい人間性」については、親孝行を望む姿に日本人の「想像」

する日本人らしい人間性の発露が見られること、そして「日本のサッカーの為に全力を尽すことを公約した」と言説上で描かれたときに「精神的にも完全に日本に帰化した」と認識されていることを中心に論じた。

（２）「Ｊリーグにみる在日コリアンの民族アイデンティティ」（浅井学園大学短期大学部・千葉直樹氏）･･･報告者は、Ｊリーグのプロチームに所属した在日コリアンのサッカー選手の民族アイデンティティ、国家への帰属意識を明らかにすることを目的とし、2004 年３月から 2006 年８月にかけて、在日コリアンのＪリーグ経験者５名にインタビュー調査を行った。インタビューの主な結果は、１）民族学校か日本学校に通うかに応じて、選手の民族アイデンティティは、祖国志向と帰化志向に分かれたこと、２）在日コリアンの優秀性を説明する上で、精神面の強さを強調する選手が多かったこと、３）ほとんどの選手が特に差別を経験したことがないと回答した一方で、民族に関して誹謗・中傷される経験をしていたこと、というものであった。質疑応答においては、調査方法に関する質問や、「学校教育が民族アイデンティティを作っているのではないか」という意見が出された。

（３）”The cultural Implications of Sports movie in Native Taiwanese－With movie (My Football Summer) for example- “ (Wang Szu Hong, National Taiwan Normal University)

ABSTRACT: The purpose of this research is to present the cultural implications of Native Taiwanese in the sports movie, with aspects of Native Taiwanese education, related policy of the hygiene and employment. This research is based on the movie, My Football Summer. The cultural implications that the Native Taiwanese present in My Football Summer: 1. Socialization, 2. Agent of socialization, 3. Significant other, 4. Dominant American sports creed, 5. Competition, 6. Flow, 7. Ephemeral role, 8. Symbolic refuge, 9. Culture of risk, pain, and injury, 10. Normalization of pain and injuries, 11. Macho, 12. Sport ethic, 13. Antagonistic cooperation, 14. Aversive socialization, 15. Role conflict, 16. Role strain, 17. Sport specialization, 18. Racial minority group.

報告者および参加者にとっての第２言語である英語で報告と質疑応答が行われたこと、そして主題である映画そのものを示さずに報告が行われたこと等により、若干の混乱があったが、会場で通訳を買って出た台湾出身の留学生のご支援のおかげで有意義な意見交換ができたことを付記したい。

**〈会場Ｆ〉　座長：山本教人（九州大学）**

**大相撲における女人禁制の研究５ －平成 17・18 年９月東京場所観戦者の比較－**

了海　諭　（東海大学）

**大相撲における女人禁制の研究６ －平成 18 年（2006）九月東京場所の観客意識調査－**

生沼　芳弘　（東海大学）

2003 年より生沼さんが中心となり行っている大相撲観戦者に関する継続研究の結果報告であった。

了海さんは、2005 年と 2006 年に研究グループが行った質問紙調査の結果の比較と、両調査と 1957

年に大相撲協会が行った観客調査の結果を比較したデータを示され、おのおのの時点で観客の性別割合や年齢構成に違いがあることなどを報告された。
生沼さんのご報告は、女性が土俵に上がることの是非を問うことを主要な目的としていた。過去に行われた観戦者の調査結果と比較したところ、2006 年調査において、女性は土俵に上がれないとする「女人禁制」を支持する意見が男女ともに増えていた。このような結果の背景として、社会全体の保守化が指摘された。
　いずれも、容易には近づきがたい（と思われる）大相撲協会のお墨付きを得てなされた大変貴重な調査研究である。ただ、数回にわたって行われてきた研究のデータがあまり生かされていないような印象を受けたので、この点に関し、これからのより一層の研究の発展を期待しながらいくつか述べさせていただきたい。
　まず了海さんのご報告は、調査結果の単純集計が示されたのみであり、どうして報告されたような差異が生じたのかの原因については十分な検討がなされていないように思われた。このためか、フロアからも指摘があったように、示されたデータと「まとめ」の整合性が理解しづらい印象を受けた。生沼さんのご報告では、%の増減だけではどうにも判断しかねるような結果がいくつか提示されていたのが気になった。また、過去に行われた調査と今回報告の元になった調査とでは、質問の仕方や尺度化の手続きに若干食い違いがみられ、そのことがフロアの理解を妨げる一因になっていたようにも思われた。もう一歩踏み込んだデータ解析を期待したい。最後に、大相撲観戦者の「女人禁制」支持についてであるが、調査対象者のほとんどが大相撲ファンであろうことを思うと、これが果たして社会の保守化を反映したものであるのかどうかは疑問である。「大相撲フォビア」の意見も聞いてみたいところだ。

## ２．２００６年度総会議事録

### 日本スポーツ社会学会 2006 年度総会議事録

日　時：2007 年 3 月 26 日（月）17：30～18：30
場　所：金沢大学
配布資料：2006 年度決算書案、2007 年度予算書案

１．開会
２．会長挨拶
　伊藤公雄会長より挨拶があった。
３．議長の選出
　高橋豪仁会員が選出された。
４．審議事項
　①2006 年度事業報告について
　　・編集委員会：『スポーツ社会学研究第 15 巻』編集・刊行

なお、15 巻の「研究委員会特別企画」論文は、編集委員会からの依頼論文であり、研究委員会が本誌における特別な論文発表カテゴリーを持つことを意味するものではなく、今回限りの扱いであることが説明された。

第 15 巻の定価が 1800 円となっているが、1900 円の誤りであり、この件の販売上の問題については、基本的に創文企画が責任をもつことになるが、今後、編集委員会で対応してゆくことになった。

・研究委員会：研究テーマ「スポーツの空間・空間のスポーツ」に沿った委員会と公開研究会を 2 度実施し、それに基づいて第 16 回学会大会に研究委員会シンポジウムを企画した。

・国際交流委員会：日韓交流協定に基づき、韓国スポーツ社会学会に、高橋義雄会員を派遣した。

第 16 回大会に国際交流委員会シンポジウムを企画した。

・広報委員会：会報 43・44・45 号を作成し学会ＨＰにアップした。

各委員会からの依頼情報をＨＰにアップした。

・ISSA 国際会議開催準備委員会：

開催の大枠を計画し、是黄理事会に提案し、基本的な承認を受けた。準備委員を推薦し、理事会の承認を受け、準備委員会の立ち上げを行った。ISSA 事務局長ｽﾃｨｰｳﾞ･ｼﾞｬｸｿﾝ氏を第 16 回学会大会に招聘し、打ち合わせを行う。

佐伯理事長より以上の報告があり、承認された。

②2006 年度決算報告・監査報告について

配布資料の「2006 年度決算書（案）」に沿って、萩原事務局長から説明があった後、東元春夫・沢田和明監事による会計監査報告が東元監事よりあった。

適正に処理されているということで、収入の部総額￥2,852,479、支出の部総額￥2,685,720、繰越金￥166,759 が承認された。

③2007 年度事業計画について

通常の各委員会・事務局の活動に加えて、ＩＳＳＡセミナーの開催と、それに関わる研究委員会、国際交流委員会の連携･協力及び海外向け広報の充実が佐伯理事　　長より提案され、承認された。

④2007 年度予算案について

萩原事務局長より、配布資料の 2007 年度予算書案における繰越金は￥166,759 へ、同予備費は￥31,759 へという訂正があった。2007 年度予算は、ＨＰの英文整備のため広報委員会予算、また活性化に伴う理事会開催増和を見込み理事会予算が増額された。また、編集委員会予算は経費実績から見て余裕があるので減額し、　　総額￥2,726,759 が提案され、承認された。

⑤2007－08 年度役員選出について

佐伯理事長より、2007 年 2 月実施の選挙結果により選出された理事 11 名と会長による推薦理事 3 名の計 14 名の理事が選出され、それに基づき、次のような理事　役割分担と監事からなる執行体制を構成することが提案され、承認された。

会　長　　：伊藤公雄

理事長　　：菊幸一

事務局長　　：松田恵示

編集委員会　　：中江桂子（委員長）・松村和則・内海和雄
研究委員会　　：清水諭（委員長）・飯田貴子・中島信博
国際交流委員会：杉本厚夫（委員長）・黄順姫・山下高行
広報委員会　　：野川春夫・山口泰雄
監　事　　：平野秀秋・牧野紀子

⑥第 17 回学会大会の開催について

佐伯理事長より、第 17 回学会大会は、西山哲郎会員を開催担当者とし、2008 年 3 月 17・18 日（月・火）を予定として中京大学で開催することが提案され、承認された。引き続き、西山会員から歓迎の挨拶があった。

⑦その他

1）佐伯理事長より、ISSA 学会大会の開催については、理事会に一任されていたが、前期理事会で準備委員会の開催計画を了承し、2008 年 7 月、京都地区で開催することに決定した旨、報告があった。引き続いて、ISSA 事務局長、Steve Jackson 氏より挨拶があった。

2）萩原事務局長より、JISS を通じた Sport Discus への論文抄録（英文）提供について、提供先の Sport Discus が公益団体から私企業に買い取られた為、再度検討を必要とするが、特に問題はないと考えられるので、改めて提供することが提案され、承認された。

5．報告事項等

①黄国際交流委員長より、国際交流委員会シンポジウム参加外国人スピーカー、シン・イハン氏（サウスカロライナ大学）、カン・ヒョミン氏（カンウォン大学・韓国スポーツ社会学会副会長）の紹介があり、引き続き両氏の挨拶があった。

②萩原事務局長より、会員動向について、正会員 324、学生会員 100、購読会員 11（内未納 1）、賛助会員 3 である旨の報告があった。

6、閉会

以上

# 2006年度　決算書

**収入の部：** 2,852,479
**支出の部：** 2,685,720
**次年度繰越金：** 166,759

**収入の部**

| 項目 | 内訳 | 予算(A) | 実績(B) | 差額(B－A | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 繰越金 | | 59,833 | 59,833 | 0 | |
| 会費 | 正会員(2005年度～@7000) | 2,030,000 | 2,240,000 | 210,000 | 320件 |
| | 正会員(2004年度迄@5000) | | 85,000 | 85,000 | 17件 |
| | 学生会員(2005年度～@4000) | 280,000 | 284,000 | 4,000 | 71件 |
| | 学生会員(2004年度迄@3000) | | 12,000 | 12,000 | 4件 |
| | 購読会員 | 45,000 | 30,000 | −15,000 | 10件 |
| | 賛助会員 | 60,000 | 60,000 | 0 | 3社 |
| 研究誌販売 | | 48,000 | 79,600 | 31,600 | 創文企画販売114冊 |
| その他 | 銀行利息・不足分入金等 | 10,000 | 2,046 | −7,954 | |
| 合計 | | 2,532,833 | 2,852,479 | 319,646 | |

**支出の部**

| 項目 | 内訳 | 予算(A) | 実績(B) | 差額(B−A) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 編集委員会 | 研究誌15巻編集費 | 750,000 | 750,000 | 0 | |
| 研究委員会 | プロジェクト研究補助 | 400,000 | 400,000 | 0 | |
| 国際交流委員会 | 日韓交流費等 | 300,000 | 300,000 | 0 | |
| | ISSA Japan 会議費 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 広報委員会 | サーバー維持費等 | 100,000 | 100,000 | 0 | |
| 学会大会経費 | 学会大会運営補助 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 理事会経費 | 旅費・会議費等 | 150,000 | 159,183 | 9,183 | |
| 通信費 | 研究誌の発送費等 | 150,000 | 94,340 | −55,660 | |
| 事務局経費 | アルバイト料・文房具等 | 170,000 | 130,527 | −39,473 | 選挙費81,867円を含む |
| 手数料 | 銀行振込手数料 | 5,000 | 1,670 | −3,330 | |
| 積立金 | 研究誌・国際会議等 | 0 | 350,000 | 350,000 | 郵便局積立＊ |
| その他 | 上記項目外支出 | 107,833 | 0 | −107,833 | |
| 合計 | | 2,532,833 | 2,685,720 | 152,887 | |

繰越金　166,759　　(2007年3月16日締め)

| 所在 | 所在名 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 銀行 | 三井住友銀行　恵比寿支店 | 56,534 | |
| 郵便振替口座 | 郵便局 | 0 | |
| 現金 | 事務局 | 110,225 | |
| ＊郵便積立 | 郵便局(ぱるる) | 350,000 | 積立累計55万円 |

帳簿、領収書、通帳等を監査した結果、上記の決算書どおり適切に処理されていることを認めます。
2007年3月22日

監事　　東本　春夫
監事　　沢田　和明

# 2007年度　予算書

**収入の部：** 2,726,759
**支出の部：** 2,726,759
**差引残高：** 0

**収入の部**

| 項目 | 内訳 | 2007年度 | 2006年度 | 前年度差額 | 備考(件数) |
|---|---|---|---|---|---|
| 繰越金 | | 166,759 | 59,833 | 106,926 | |
| 会費 | 正会員 | 2,100,000 | 2,325,000 | −225,000 | 300 |
| | 学生会員 | 300,000 | 296,000 | 4,000 | 75 |
| | 購読会員 | 30,000 | 30,000 | 0 | 10 |
| | 賛助会員 | 60,000 | 60,000 | 0 | 3 |
| 研究誌販売 | | 60,000 | 79,600 | −19,600 | 創文企画　100 |
| その他 | | 10,000 | 2,046 | 7,954 | |
| 合計 | | 2,726,759 | 2,852,479 | −125,720 | |

**支出の部**

| 項目 | 内訳 | 2007年度 | 2006年度 | 前年度差額 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 編集委員会 | 研究誌16巻編集費 | 700,000 | 750,000 | −50,000 | |
| 研究委員会 | プロジェクト研究補助 | 400,000 | 400,000 | 0 | |
| 国際交流委員会 | 日韓交流費 | 300,000 | 300,000 | 0 | |
| ISSAセミナー | ISSA　Japan会議費 | 400,000 | 200,000 | 200,000 | 開催準備 |
| 広報委員会 | サーバー維持費 | 155,000 | 100,000 | 55,000 | 英文整備 |
| 学会大会経費 | 17回学会大会運営補助 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| 理事会経費 | 旅費・会議費等 | 345,000 | 159,183 | 185,817 | 理事会回数増加 |
| 通信費 | 研究誌等の発送 | 90,000 | 94,340 | −4,340 | |
| 事務経費 | 事務補助アルバイト等 | 100,000 | 130,527 | −30,527 | 選挙なし、事務局移転 |
| 手数料 | 銀行振込手数料 | 5,000 | 1,670 | 3,330 | |
| 積立金 | 研究誌・国際会議等 | 0 | 300,000 | −300,000 | |
| 予備費 | | 31,759 | 0 | 31,759 | |
| 合計 | | 2,726,759 | 2,635,720 | 91,039 | |

## ３．理事会報告

### ・新理事挨拶

理事長に就任するにあたって

菊　幸一（筑波大学）

「青天の霹靂」とはまさにこのことを言うのであろう。前日の能登地震は、確かに大地を揺るがす自然界のそれであったが、私自身にとっては 2 日間も続いたこの衝撃…、どちらかと言えば新理事会での衝撃の方が個人的には大きかった。さりとて、いつまでもこの事態を嘆いているわけにもいかず、新理事会で承認された以上は覚悟を決めて取り組みたいと決意を新たにしている。

幸い、伊藤会長とは私が関西（奈良女子大学）に在住・勤務していた折、1997 年 3 月に京都で国際シンポジウム「スポーツは世界を変える」（内容は「変容する現代社会とスポーツ」世界思想社、1998 年を参照）で、伊藤研究委員長のもと研究担当で企画を練ったり、その後も編集委員会で伊藤編集長のもと編集委員として査読を担当したりと、何かにつけていろいろと勉強させてもらえる機会を多く与えていただいた。その点では、気軽にご相談させてもらえる関係にあることを感謝している。

さて、日本スポーツ社会学会は今回の金沢大会で 16 回目を迎え、着実に成人の域に達しようとしている。ただし、齢（よわい）よりも内容が問われていることは言うまでもない。内容の評価には大きく質の高度化（respectability）と量の大衆化（popularity）の 2 つの水準が考えられるが、現在の学会の状況はどうであろうか。学会発表や学会誌における論文の質、広報を中心とする活発な意見交換、学会プロジェクト研究の深化と発展、学会大会の活性化、グローバリズムへの対応等々、いずれの側面においても課題は山積している。私としては、佐伯前理事長が構築された各委員会組織の自立性を尊重しつつ、それらの機能が有機的に関連して相乗的な効果を生み出すように努力していきたいと考えている。その上で、任期中の当面の課題を以下のように考えている。

１）来年度開催のＩＳＳＡ国際大会成功に向けての支援体制の整備

２）研究誌の発刊体制の検討と投稿機会の量的拡大に向けた体制の整備

３）学生会員の意見の吸い上げを可能にする体制の整備

以上、その他にも多くの課題があると思われるが、会員諸氏の忌憚のない意見や要望に耳を傾けながら、他の理事とともに理事会の長としての責任を果たしていきたいと考えている。何卒、よろしくお願いします。

## ・２００６年度後期理事会議事録要旨

# 2006 年度後期理事会議事録要旨

日　時：平成 19 年 3 月 25 日（日）15：00～18：30
場　所：金沢大学　法経棟３F 第 2 会議室
出席者：(7：50 に北陸地震発生のため JR が動かず、出席者は羽田から飛行機にて到着した役員のみ)
　　佐伯、松村、森川、萩原、菊（事務局幹事)、西山（17 回学会大会責任者)、以上６名
理事会不成立のため、予定の審議事項に目を通し、問題点・審議すべき点を明確にし、翌日の審議がスムースに運ぶよう準備をした。

日　時：平成 19 年 3 月 26 日（月）10：00～12：00
場　所：金沢大学　法経棟３F 第 2 会議室
出席者：理事：伊藤、佐伯、井上、亀山、トンプソン、松尾、松村、水上、森川、萩原、東元（監事)、
　　西山（17 回学会大会責任者)、杉本（ISSA 国際大会開催準備委員会）
　　新理事：飯田、伊藤、菊、杉本、中江、松田、松村
配布資料：各委員会決算・活動報告書及び 19 年度予算申請書・活動予定（別紙①～⑨、⑫）
　　入会者一覧（別紙⑩)、退会・資格停止者一覧（別紙⑪）

**１．審議事項**

（1）総会議案について

１）平成 18 年度事業報告及び決算報告が各委員会委員長及び事務局長よりあり、それぞれ承認された。
　編集・研究・広報・IS SA（別紙①～④）国際交流委員会（別紙⑫)、事務局（別紙⑧）

２）東元監事より事務局決算報告については、決算書どおり適正な処理であることが報告された。

３）平成 19 年度事業計画及び予算案について、各委員会委員長及び事務局長より提案があった。
　編集・研究・広報・ISSA（別紙④～⑦）国際交流委員会（別紙⑫)、事務局（別紙⑨)。しかし 2008 年度は ISSA 学会大会があり、理事会内の連絡をより緊密にとる必要上理事会経費を増額、かつ外国人会員増加および ISSA 関連で外国人のホームページアクセスの増加が見込まれ、英文整備をする必要があると判断し広報委員会費増額、編集委員会は繰越金にゆとりが見られることから減額し、事務局提案の予算案は最終的に総会に提示されたように修正された。

４）平成 19 年度学会大会について
　開催責任者をお引き受けいただいた、中京大学社会学部の西山哲郎会員より
　挨拶があり、中京大学より補助金（20 万円）が出ること、体育学部来田享子氏の協力が得られることの報告があった。第 17 回大会開催日時は 2008 年 3 月 17 日（月)・18 日（火)、を予定とし、場所は中京大学八事校舎と決定した。

５）森川選挙管理委員会委員長から、以下のような選挙投票状況報告があった。
　選挙人 251 人→郵送投票９６（有効９３、無効３：〆切遅）

また、選挙結果を会長に報告し、会長補充の理事も含めて次の 14 名に決定した旨報告があった。

新理事：飯田、伊藤、内海、菊、清水、杉本、中江、中島、野川、黄、松田、
松村、山口、山下

6）JISS による本学会スポーツ研究情報の海外提供に関する事項について：

昨年の総会で、学会誌の英文抄録を JISS 経由でスポーツディスカスに提供することが決定しているが、スポーツディスカスが EBSCO（米国出版情報の私企業、D$B の格付け最高ランク）に買い取られるという状況変化があったため、この件を総会に再度かけることとする。

（2）その他

1）ISSA 学会大会 2008 について

ISSA 国際大会開催準備委員会杉本厚夫会員より、準備委員会のメンバー提案（伊藤、海老島、菊、杉本、高橋豪仁、高橋義雄、平井、黄、松田、山下）と、開催場所は京都とし、開催時期は 7 月末、スポンサーを探しているという報告があった。メンバーについては研究委員会委員、国際交流委員会委員が入ること、プログラム作成に当たっては研究委員会と協議の上決定することの条件が附加された。なお、総会において ISSA 事務局長、スティーヴ・ジャクソン氏を紹介することが了解された。

2）各委員会規程作成に今期取り掛かったが（編集委員会を除く）、完成を見なかったため、不備な部分を確認し、次期に引き継ぐこととした。

3）その他

新入会員：正会員 10 人・学生会員 30 人（別紙⑩）、退会 11 人・資格停止者 21 人（別紙⑪）を承認した。

## 2．報告事項

（1）大学評価機構より平成 19 年度専門委員 5 名の登録要請が 2006 年 12 月にあり、
伊藤、佐伯、平野、森川、黄会員を推薦した。

(2) 事務局より

・日本学術会議社会学委員会で 2006 年 11 月に懇談会があり、当学会から松村研究委員長が出席した。その後、社会学委員会の情報ネットワーク構築のため「社会学系コンソーシアムメーリングリスト作成のご案内」が来たので返事をだした。

・ 会員数の現状：正会員 324、学生会員 100、購読会員 11（内未納 1）、賛助会 3

以上

## ４．事務局からのお知らせ

今年度より事務局を担当することになりました東京学芸大学の松田です．会員の皆様方のお力添えをいただきながら、円滑な学会運営を目指して頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。また、事務局には、幹事として東京学芸大学大学院博士課程の原祐一君と宮坂雄吾君にも参加してもらうことになりました。いたらないことも多いかと思いますが、3人体制で業務を行ないます。お気づきの点などございましたらどうぞお気軽にご連絡いただけますようにお願い申し上げます。

### １）メールアドレス登録のお願い

現在、経費削減のため、学会事務局からのご連絡をメールでお送りしたいと考えています。よって、登録されていない方、アドレスが変更された方はメールアドレスを登録していただきたいと思いますので、以下の事務局アドレスまで、ご連絡いただければ幸いです。よろしくお願いします。

**日本スポーツ社会学会事務局E-mail：jsssjimukyoku@gmail.com**

### ２）年会費について

会員のみなさまのお手元に、今年度の会費納入のお願いが届いていると思います。8月までの納入率が65%程度となっております。学会運営は会員のみなさまからの会費で行なわれておりますので、まだお振込でないみなさまには、ぜひともご納入いただけますようにお願い申し上げます。振込郵便口座は以下の通りです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

郵便振込口座：００３９０－０－４３９６２
口座名義：　日本スポーツ社会学会事務局

## 編集後記

まずは今号の発刊が大変遅れましたことをお詫び申し上げます。本年度は理事会の改選期にあたり、業務の引き継ぎに手間取ってしまいましたことがその大きな理由です。会員のみなさまにご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げますとともに、今後このようなことがないように進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今号は、3 月に行なわれました金沢大学での学会特集号です。学会での議論をお伝えすることができたらと思います。(K.M)